

Issues and possibilities for giving a lecture in English -Introduction of cases in School of Medicine-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-05-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Akagi, Tadayuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00054017

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



実践報告

講義に英語を導入することで見えてきた課題と可能性 ～医学類における一例の紹介～

赤木 紀之^{注1}

要 旨

世界トップレベルの研究を行う大学や国際化を牽引する大学を重点的に支援する文部科学省の事業として、「スーパーグローバル大学(SGU)創成支援事業」がある。金沢大学は当該事業の「グローバル化牽引型」に採択されており、SGU事業の取り組みとして、2023年度を目途に学士課程の50%の授業、大学院課程の100%の授業の英語化を目指している。本稿では、筆者が試みている医学類専門科目での授業の英語化の取り組みと、それに対する学生からの評価や声について報告し、今後の授業の英語化や課題について考察する。一連の取り組みから、「学生が講義内容を日本語で十分に理解している」という前提が、授業の英語化には肝要であることが見えてきた。

I. はじめに

金沢大学はスーパーグローバル大学(SGU)創成支援事業の「グローバル化牽引型」に採択され、大学改革と教育の国際化が加速度的に推進されている。「本学が目指す10年後の姿」には、「外国人教員等の増加」「留学生の増加」「日本人学生の留学経験者の増加」など、地域と世界に開かれた教育重視の研究大学としてのさまざまな使命や目標が掲げられている。「10年後に本学が目指す姿」すなわち「2023年に本学が目指す姿」を実現させるために、一教員として何ができるであろうか？本学が掲げている目標の一つに「英語による授業の増加」がある。「学士課程の50%の授業を英語化する」という点に関しては、教員個人レベルの取り組みで達成が可能であり、理論的には2回に1回の授業を英語で実施すれば数字上は達成できる。しかし、授業の主体となるのは学生である。英語で授業を実施することで、学生はどのように受け止めるのだろうか？筆者は「50%」という数値は一旦忘れ、授業を英語化することで、学生達はどのような反応を示すのか、そもそも筆者自身が英語で講義が可能なのか自問しながら、試験的に英語

での授業を導入してみた。本稿では、まず、本学が準備している「タフツ大学ELP教員研修プログラム」の様子を筆者の体験をもとに紹介する。その上で、筆者が実際に導入した授業の工夫や英語化への取り組み、そして最も重要な学生からの授業評価や声について報告し、今後の授業の英語化や見えきた課題について考察したい。

II. タフツ大学ELP教員研修プログラムの様子

2015年より本学においてタフツ大学ELP(English Language Program)による教員対象英語研修プログラムが開講されている。これは「スーパーグローバル大学創成支援事業」の一環として実施され、専門知識や教養を日本語と英語両方で表現し、英語による授業実施を可能にするための、教員の英語力強化を目指したプログラムである。角間ゲストハウスに併設されたスーパーグローバルELPセンター内で行われている。

著者は2017年度春季コースを受講した。当該コースは、2017年1月に電子メールで受講者募集の案内が届き、3月に受講者決定の通知が届いた。プログラムには10名の受講者がおり、全日程は表1の要領で実施された。講師はタフツ大学のLynn Stevens氏とELPセンターのJames Rosenberg氏が担当された。このプログラムはいわゆる「英会話クラス」ではなく、「いかに効果的に教えるか」を英語で学ぶクラスであるように感じた。

表1 2017年度春季コースの日程

分類	場所	期間
onsite 1	ELPセンター	3月13日(月)－3月17日(金)
online	各自のパソコン	3月－8月(17週間)
onsite 2	ELPセンター	8月28日(月)－9月1日(金)

Onsite 1では、「異文化コミュニケーションの障害はなにか」、「コンセプトマッピングの作成方法」、「学修理論」、「Body language」、「TEDの視聴」などを行い、最終的に一人15-20分程度の英語でのプレゼンテーションを実施した。Onlineでは、タフツ大学が準備した課題が毎週Webサイト上で公開され、期限までに課題を提出するという形式であった。文法や英作文に加え、教授技法に関する課題が多かった。月1回、Skypeを利用しLynn Stevens氏との面談もあった。Onsite 2では今までの課題の総まとめと、学習した技法やアイデアを利用して1人60分程度の英語プレゼンテーションを行い、受講者同士で評価し合った。

筆者は当該プログラムの受講成果を試すべく、まず医学類1年生向けの講義「医薬保健学基礎」に対し、当該プログラムで学んだ技術や技法を一部取り入れ日本語で実施した。また医学類2年生向けの講義「動物実験と再生医学」に対しては、当該プログラム受講前より授業の英語化に取り組んでいたため、授業の質の更なる向上を目指した。

Ⅲ. 「医薬保健学基礎」と「動物実験と再生医学」の概況

医学類のカリキュラムには、他の学類と異なる点がある。1年次には他の学類同様、クォーター制に従い、主に角間キャンパスで共通教育科目を受講する。しかし、2年次以降は医学類専門科目を毎日宝町キャンパスで学ぶ。専門科目の多くは30-40コマの講義と実習から構成され、3-4カ月かけて一つの科目を履修することから、2年次以降の授業は実質的には、前期／春学期、後期(前半)／秋学期、後期(後半)／冬学期の3学期制で運営されている。また、授業時間を確保するために夏季休暇は短く、9月の第一週から授業が始まり、春季休暇も短い。

学域GS科目である「医薬保健学基礎」の講義は、医学類1年生を対象としてQ1とQ2に開講される必須科目である。宝町キャンパスで開講され、オムニバス形式で約9名の教員で分担し、15回の講義と1回の定期試験から構成されている。筆者は2016年度より「タンパク質の構造と機能」の1コマを担当している。講義内容はタンパク質の構造、機能、調節、研究方法などに関する授業を行っている。

専門科目である「動物実験と再生医学」の講義(必須科目)は、医学類2年生を対象として後期(前半)／秋学期に開講され、5～6名の教員によるオムニバス形式で11回の講義と1回の定期試験から構成されている。医学類2年生の段階では、まだ「内科学」や「外科学」といった臨床医学に関する講義は始まっておらず、「解剖学」や「生化学」、「生理学」など基礎医学科目を学習した後に、「動物実験と再生医学」の授業が行われる。筆者は2008年度より「動物実験と再生医学」の担当教員として参画し、例年2～4コマの授業を担当している。講義内容としては、基礎医学の中でも主に多能性幹細胞、体性幹細胞、細胞のがん化などの講義を実施している。

両講義とも、約110～120人の学生を対象とした大講義室での授業で、パワーポイントを利用しスクリーンに映し出す形式の講義である。

IV. 医学類1年生に向けた講義(日本語)の実施概要と学生からの評価

1. 「医薬保健学基礎」実施概要

タフツ大学ELP教員研修プログラムを半分程度履修した時点で、医学類1年生向けの「医薬保健学基礎」の担当時期を迎えた。そこで、この段階までに学んだ技法を積極的に取り入れ、日本語で講義を行った。具体的には、establishing objectives, activating prior knowledge, scaffolding instruction, active learning (quiz), generation of short break, improvement of talking speed and tone, higher-level questionなどの技法やアイデアを授業運営に取り入れた。授業終了後に、アンケートを実施し学生からの授業評価を回収した。表2に示すように、アンケートには5つの質問を設定し、各項目とも5段階で評価してもらった。

表2 アンケート内容

質問	内容	5段階評価				
		1	2	3	4	5
1	講義内容	つまらない	←	普通	→	興味深い
2	講義の理解度	全く理解できない	←	普通	→	良く理解できた
3	話すスピード	早い・遅い	←	普通	→	ちょうど良い
4	スライド/プレゼン	分からない	←	普通	→	良く分かった
5	配布資料	見にくい	←	普通	→	見やすい

2. 学生による授業評価の結果

タフツ大学ELP教員研修プログラムの受講前(2016年度)と、受講中(2017年度)の講義において、前述したアンケートを集計した結果が図1である。当該プログラムで学んだ技法やアイデアを取り入れることで、学生からの評価は格段に上昇した。各項目とも、学生による授業評価の平均値が0.4から0.56ポイントの上昇が認められ、このプログラムの受講成果が大きく反映された。

講義に英語を導入することで見えてきた課題と可能性～医学類における一例の紹介～(赤木)

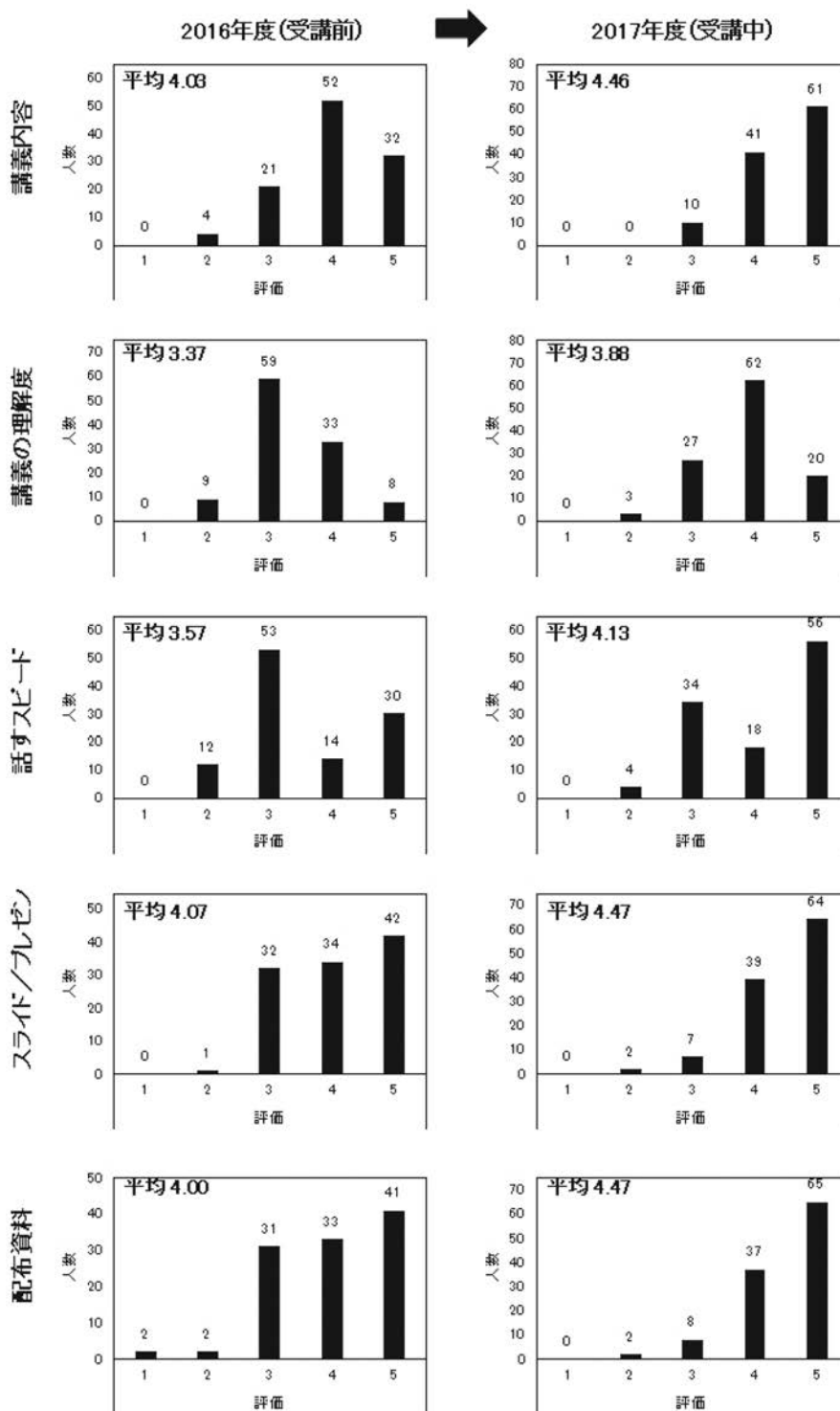


図1 ELPプログラム受講による授業評価の変化

V. 医学類2年生に向けた講義(英語)の実施概要

1. 「動物実験と再生医学」実施概要

次に医学類2年生に向けた英語での講義について紹介したい。表3に示すように、2016年度と2017年度は2コマ、2018年度は4コマの講義を筆者が担当した。2016年度の講義より、毎年1コマ英語での講義を試験的に導入した。なお、著者の英語力の指標としては、2005年4月から2008年8月までの約3年半、アメリカ カリフォルニア州ロサンゼルスへの研究留学した程度で、帰国子女でもなければ英会話学校に通った経験もない。

表3 「動物実験と再生医学」講義の実施状況

年度	講義日	時間	内容	受講登録者数
2016年度	11月11日(金)	3限	再生医学と細胞のがん化(日本語)	122名
	11月14日(月)	1限	再生医学と細胞のがん化(英語)	
2017年度	11月16日(木)	2限	再生医学と細胞のがん化(日本語)	125名
	11月30日(木)	1限	再生医学と細胞のがん化(英語)	
2018年度	10月9日(火)	4限	幹細胞システム1(日本語)	120名
	10月19日(金)	2限	幹細胞システム2(日本語)	
	10月23日(火)	4限	幹細胞システム3(日本語)	
	11月2日(金)	2限	幹細胞システム4(英語)	

2. 2016年度の実施状況(教員研修プログラム受講前)

講義の英語化への工夫として、第1回目の講義は従来通り日本語の配布資料を利用した日本語の講義を実施した。講義終了後に「次回は今日と同じ講義を英語で実施するので、今日の日本語の配布資料は必ず持参するように」と周知した。第2回目の講義は、英語の配布資料を利用した完全に英語による講義を実施した。講義の最後に、配布した英単語リストを和訳させる作業(quiz)を数分間で実施し、その後、答え合わせを行った。全ての講義が終わった時点で、学生にはアンケート(後述)に回答してもらった。

3. 2017年度の実施状況(教員研修プログラム受講後・前年度と同様な形式)

前年度同様、第1回目の講義を従来通り日本語の配布資料を利用した日本語の講義

を実施し、今回は英語で講義する旨を周知した。前年度のアンケート(後述)から「予め単語リストが欲しい」という学生の声があったため、当該年度は、次回使用予定の専門用語(英語)のリストを配布し、和訳する課題を出した。第2回目の講義は、前年度と同様な運営を行った。

なお、この年より医学類2年生には外国人講師による学域GS言語科目(医学英語)の授業が新たに導入された。通年で開講されており、この年から医学類2年生は英語に触れる機会がより増えている。

4. 2018年度の実施状況(教員研修プログラム受講後・技法の積極導入)

当該年度は、筆者が4コマの授業を担当したので、最初の3回の講義を従来通り日本語の配布資料を利用した日本語での講義を実施した。3回目の講義終了後に「今回は講義を英語で実施する」と伝えた。また、前年度同様、次回使用予定の専門用語(英語)のリストを配布し、和訳してくるよう課題を出した。第4回目の講義は、英語の配布資料を利用した完全に英語による講義を実施した。この講義では、約75%を過去3回分の復習に充て、残りの約25%を今回の授業で初めて触れる内容の構成にした。特に当該年度はタフツ大学ELP教員研修プログラムで学んだ様々な技法(the first 30 seconds have the most impact, offer a roadmap, activating prior knowledge, applying activating prior knowledge, establishing objectives, building background, high level question, active learning, informal assessment)を積極的に取り入れた。全ての講義が終わった時点で、学生からアンケート用紙を回収した。

VI. 医学類2年生に向けた講義(英語)の学生からの評価

講義への英語の導入にあたり、英語による講義の終了後に、アンケートを実施し講義の評価と学生からのコメントを回収した。表4に示すように、アンケートには5つの質問を設定し、各項目とも5段階で評価してもらった。また自由コメント記述欄も準備し、学生の声を聞いた。

表4 アンケート内容

質問	内容	5段階評価				
		1	2	3	4	5
1	講師の英語力はどうか？	下級	←	普通	→	上級
2	英語での講義の理解度は？	全く理解できない	←	普通	→	良く理解できた
3	英語のスピードは？	早い・遅い	←	普通	→	ちょうど良い
4	英語のスライド/配布資料は？	分からない	←	普通	→	良く分かった
5	今後、英語の講義をもっと導入すべき？	すべきではない	←	分からない	→	すべき
-	自由コメント					

1. 2016年度の評価とコメント

2016年度の英語での講義について、学生による授業評価とコメントの集計を以下に示す(図2と表5)。なお、各グラフとも縦軸は人数を示す。

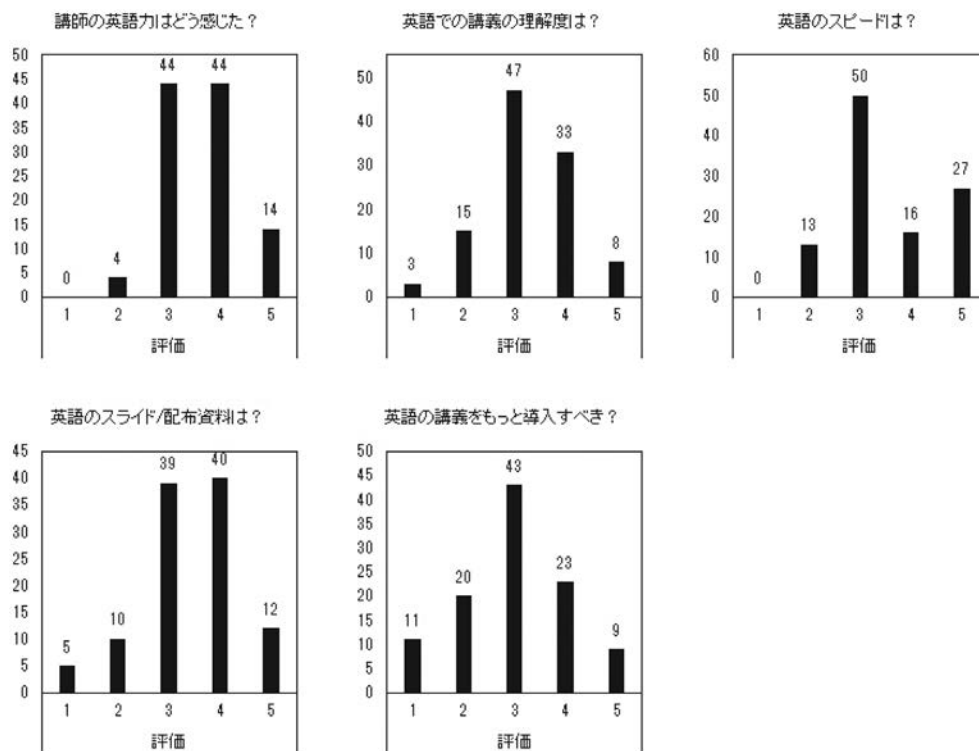


図2 2016年度の学生による授業評価

表5 2016年度の学生からのコメント(抜粋)

英語の講義に対して、好意的な意見の例 (抜粋, 計31名)
全ての授業を英語でやる必要はないが、一部は導入することで有益であると思います。
英語のスライドがあり、講義を受けることで自然に重要な英単語が頭に入ってくると思う。
英語で講義を聞くことで理解を深められたと思う。講義をして頂きありがとうございました。

一回目が日本語の講義で良かった、という意見の例 (抜粋, 計28名)
日本語の講義の後に同じ内容を英語で行うというのは新鮮でした。過去に何度か英語のみの講義を受けたことがありますが、その時に比べ理解度が全然違いました。このような形を増やしてゆけば英語に対する苦手意識もなくなってゆくと思うので、良い試みだと思いました。僕個人としては英語の講義や英語に触れる機会をもっと増やしても良いのではないかと思います。
講義の目的は知識の理解であり、それを困難にする英語のみでの講義は、金沢大学の自己満足である。その点、一度日本語で行った授業を再度英語で行う先生の授業は、確かな理解と英語での知識の理解両方できて、とても良かった。

英語の講義に対して、否定的な意見の例 (抜粋, 計18名)
この時間、正直いるのかなーと思わざるを得ないです。だったらフツーに英語勉強した方がいいのでは？と。グローバルかなんかよくわからないですが、先生も生徒も大変なことになったなーと。
金沢大学の英語化の流れについて教授がたはどう思っているのですか。ご意見お願いします。

英語の授業に対する一般的な感想の例 (抜粋, 28名)
まさか本当に英語で授業をするとは思いませんでした。すごかったです。
英語と聞いて不安に感じていましたが、前回のレジュメと照らし合わせて聞いていたら、より理解が深まったように感じました。聞き取りやすく分かりやすい英語でした。ありがとうございます。改善点を挙げるとすれば、英語の英単語に慣れていなくて時々分からなくなったので、最後のquizのような英単語集を頂ければ、より理解が深まると思います。

2. 2017年度の評価とコメント

2017年度の英語での講義について、学生による授業評価とコメントの集計を以下に示す(図3と表6)。なお、各グラフとも縦軸は人数を示す。

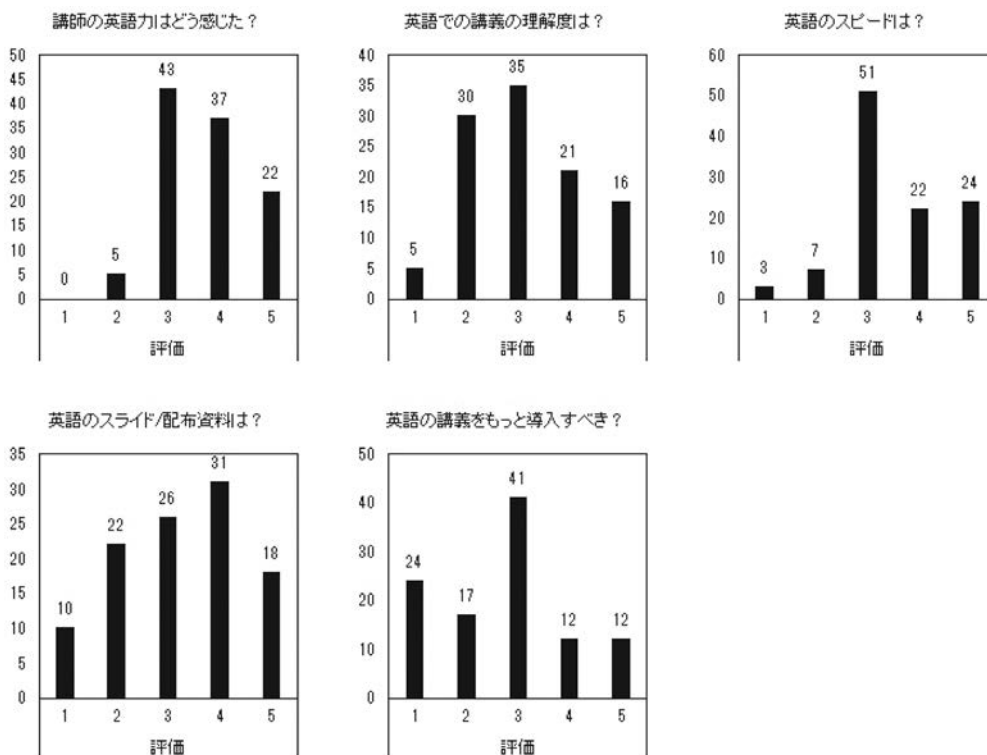


図3 2017年度の学生による授業評価

表6 2017年度の学生からのコメント(抜粋)

英語の講義に対して、好意的な意見の例 (抜粋, 計33名)
英語による講義は新鮮で面白かった。他の講義でも同じような試みがあることを期待したい。また先生の研究バックグラウンドを知ることができて、親しみを持つことができた。
非常に良い授業だったと思います。平易な英語が使われていたので良かったと思います。
著名な医学雑誌は全て英語で書かれているため、それらを読むようになるためにもこのような英語による講義は積極的に導入されるべきだと思う。

一回目が日本語の講義で良かった、という意見の例 (抜粋, 計12名)
今回のように、一度日本語の授業を受けた後なら、ある程度の理解があるので、なんとなく理解できた。これが初めて聞く内容になると理解が難しいかもしれない。
今回は日本語の講義をした後に英語の講義を受けたため。抵抗を感じることなく講義を受けられました。しかし、これでは時間がかかり英語の講義は増やせないし、いきなり英語で受けるとしたら、ただでさえ日本語でも理解が難しい医学の内容が全く分からなくなりそうです。英語の講義は英語力アップ、または英語に対する向上心をつけるためにとても良いと思いますが、医学生にとってはまず一番に日本語で医学の知識を確立するのが大切だと考えています。

英語の講義に対して、否定的な意見の例 (抜粋, 計32名)
日本語で知らない知識を外国語で理解できるわけがない。日本語で学んだことをわざわざ講義中に英語で学び直す必要性を感じない。それは個人がすべきことでは？
授業に合わせて教科書1冊を通読するのも決して楽ではありません。これに加えて更に英語も身につけようと思うと、話すにはやはり名詞を覚えるだけではなく、動詞も使える必要があります。ゆえに英語の教科書にも目を通したいところです。一方で、国試やCBTは日本語ということで、この学習順位がどうしても下がってしまいます。語学学習への興味は人それぞれですので、ペナルティではなくインセンティブの形で英語を奨励して頂ければと個人的に考えております。
そもそも基礎をそこで理解できていないのに、英語で講義をされても効果は薄いと思う。金沢大学生には全面的な英語の講義はあまりにも早すぎる。

英語の授業に対する一般的な感想の例 (抜粋, 18名)
比較的わかりやすい平易な英語で分かりやすかった。英語の方が例や表現などが単純なために、日本語の時よりわかりやすい面もあったが、一方で予備知識なしでは専門用語が多いため難しく初学者にとっては難しいのではないかと感じる。
先生が英語で授業をしていたのは、わたしにとって勇気となりました。まずは、やってみる、言ってみることで、内容が伝わることの方が、何もしないより良いとわかりました。

3. 2018年度の評価とコメント

2018年度の英語での講義について、学生による授業評価とコメントの集計を以下に示す(図4と表7)。なお、各グラフとも縦軸は人数を示す。

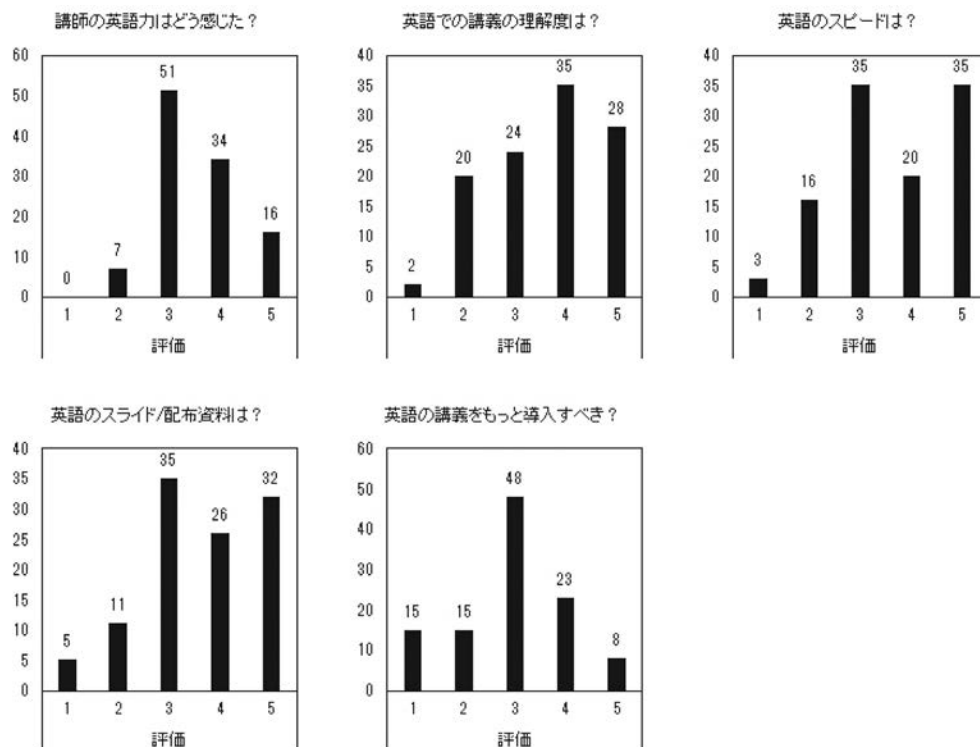


図4 2018年度の学生による授業評価

表7 2018年度の学生からのコメント(抜粋)

英語の講義に対して、好意的な意見の例 (抜粋, 計61名)
発音の良さ(日本なまりあり)と聞きやすさの両立した英語だと感じた。これなら講義を英語でやってもらってもあまり抵抗はないと思う。
皆に分かるレベルの英語を使って説明してくれるので、とても分かりやすい。英語だと流して聞くのではなく、しっかり聞こうとするので、むしろ理解できた。
英弱の自分でも理解しやすくとても楽しかったです。どうしたらわかりやすい英語でプレゼンできるのか研究してみようと思いました。

前回までの講義が日本語の講義で良かった、という意見の例(抜粋, 計6名)
英語でいきなり授業されると困りますが、3回の授業の総まとめ、応用という形であったので、もし授業回数に余裕があるのならば英語への慣れ、内容への好奇心up↑、知識のまとめという点で非常に有意義だと思う。知っている知識を使えるアウトプットの機会という点で身に付き、聞いていて楽しいと思う。
英語で講義をするなら、赤木先生のようにはじめに日本語で詳しい授業をして、最後に英語で簡単な授業をすると、とっつきやすいと思いました。

英語の講義に対して、否定的な意見の例 (抜粋, 計23名)
正直英語は講義を難しくする上、ネイティブの人が話すわけではないので、やめた方が良いと思います。どうしてもやるなら、将来必要な人が、別に英語の授業を受ければ良いと思います。
先生の英語はものすごく聞きやすく理解できたが、わざわざ講義を英語にすることには意味はないと思った。学生に対しては日本語できちり教えた方が何倍も良いと思う。

英語の授業に対する一般的な感想の例 (抜粋, 10名)
今回の授業では全員が理解できる難易度の英語だったが、より専門的な内容の授業をするときは英語でやるのは難しいと思いました。
英語での授業だと理解するまでに時間がかかるので大変だった。和訳したレジュメも欲しい。

4. 3年間のまとめ

以上、3年間の英語での講義について、学生達の評価を平均化し、年度ごとに比べると表8のようになる。「英語での講義の理解度」に関しては、2017年度の平均値が3.12であるのに対し、2018年度の平均値が3.61と約0.5ポイントの上昇が認められた。これは2018年度の講義のみ、3回の日本語授業の上で、その総まとめを英語で実施したためと思われる。しかしながら、その他の質問事項に関しては、どの年も似たような傾向が見受けられ、学生達の評価に大きな差は認められない印象がある。特に「今後、英語の講義をもっと導入すべきか?」という質問に関しては、どの年においても他の質問と比べ大幅に値が低く、学生側の消極的な姿勢が伺える。

表8 3年間の学生評価(平均値)の推移

質問事項	評価(平均値)		
	2016年度	2017年度	2018年度
講師の英語力はどう感じた?	3.64	3.71	3.55
英語での講義の理解度は?	3.26	3.12	3.61
英語のスピードは?	3.54	3.53	3.62
英語のスライド/配布資料は?	3.42	3.23	3.63
今後、英語の講義をもっと導入すべき?	2.99	2.73	2.94

一方で、筆者の取り組みそのものに関しては好意的な意見が多く得られている。表9では、3年間の学生の意見の推移を比較している。筆者の主観的な分類に基づくが、各年とも筆者が導入した英語による講義に対して否定的な意見も出ているものの、肯定的に捉える学生も数多く存在し、特に2018年度は6割の学生が好意的な意見を述べた。

なお、自由コメント欄に記載された学生からの全ての声は、本稿では紹介しきれない。興味のある方は、筆者に問い合わせ頂ければ別途対応したい。

表9 3年間の学生意見の推移

意見の分類	2016年度	2017年度	2018年度
英語の講義に対して、好意的な意見	31人(30%)	33人(35%)	61人(61%)
前回(まで)が日本語の講義で良かった、という意見	28人(27%)	12人(12%)	6人(6%)
英語の講義に対して、否定的な意見	18人(17%)	32人(34%)	23人(23%)
英語の授業に対する一般的な感想	28人(26%)	18人(19%)	10人(10%)
コメント記載者数合計	105人	95人	100人

VII. 課題と今後の展望

3回に渡る英語での授業運営と、学生からの評価や声を丁寧に拾うことで、いろいろな事が見えてきた。まず医学類の問題として、4年次に日本語で出題される computer based testing (CBT) 及び、6年卒業時に日本語で出題される医師国家試験に合格する必要がある、という点が挙げられる。これは薬学類や保健学類でも同様な状況であると推察されるが、学生側の意見として「(英語での)学習順位がどうしても下がってしまう」というのは、至極当然の意見であると言える。特に近年、生命科学領域の学術的な進歩はめざましく、医学類生が学習(暗記)する内容は想像を絶する量になり、多くの負担がのしかかっている。そのような背景のもと、特殊な専門用語を多用した英語の授業で、本当に効果的な学習成果が得られるのか議論の余地が大きく残る。

一方で、将来的に医学者として活躍するにあたり、英語の能力が必要不可欠であることは言うまでもない。最新の医学研究成果は全て英語で論文発表されており、それを速やかにかつ正確に理解する能力は基礎・臨床問わず必須である。訪日する外国人の数は年々増加し、臨床医として外国人を診察する機会も、地域を問わず頻繁になることが予想される。

教員側の英語能力も課題が残る。必ずしもネイティブレベルの英語を話す必要はないと筆者は考えているが、カタナカを羅列するだけでは学生に対して失礼であると言える。Japanese Englishでもある程度の流暢さを提供する必要はあるのではないだろうか。

今回筆者は、「日本語で講義したことを、改めて英語で講義する」というアプローチを採用した。これにより学生は前回の講義を復習できると同時に、英語での表現を知ることができる。全く新しい内容を最初から英語で実施するのではなく、「学生が知っている内容」を英語で実施することで、学生側に一定の安心感を与えられたように思える。特に2018年度は3回の日本語授業と1回の英語授業を実施したが、学生からの好意的な声が以前と比べ大幅に増えた。このことから、「十分に日本語で理解している」という前提が、授業の英語化には肝要であることが伺える。

大学の講義において、全ての配布資料を日本語と英語で併記することで「50%英語化」と捉えるか、12回のうち6回の講義を英語で実施することが「50%英語化」と捉えるのか、考え方はいろいろある。自分が担当する講義をしっかりと日本語で理解してもらい、その上で全体像を英語で紹介し理解を深めてもらう、すなわち講義全体の理解度として50%程度は英語で把握できた、というのも授業英語化の選択肢の一つではないだろうか。

【注】

- 1 医薬保健研究域医学系 再生分子医学

Issues and possibilities for giving a lecture in English

-Introduction of cases in School of Medicine-

Tadayuki Akagi

Abstract

The Top Global University Project (Super Global Universities) is a project of the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology of Japan. Kanazawa University was selected as Type B (Global Traction Type) university on the project. As a part of the project, Kanazawa University has been aiming that 50% of the bachelor lectures and 100% of the graduate school lectures will be offered in English until 2023. In the present article, I report my attempt of a lecture in English in School of Medicine. Also, I introduce the evaluation and the voice from students on it. Based on the above, I discuss a future aspect of a lecture in English and issues surrounding it. These attempts revealed that “Students already understand the contents of a lecture in Japanese very well” should be required for giving a lecture in English.